

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村，哲、ペシャワール会 編著

扉～目次

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告，pp.1-6，2004-05．石風社
バージョン：初版 2004-05-31

権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

空爆と「復興」

アフガン最前線報告

複製・出力・二次利用禁止

空爆と「復興」

アフガン最前線報告

もくじ

アフガニスタンからの発言 中村哲 7

- 「対テロ戦争」の虚構 8 / 報道されないアフガンの真実 18 / 自衛隊派遣は有害無益 28 / 「援助の論理」を憂う 35 / 破壊と援助の連鎖 45 / 復興という名の破壊 48
オキナワからアフガニスタンへ 54 / 戦禍の大地に緑と平和を 57 / 「緑の大地」を求めて 68 / 水利事業への挑戦 72 / アジアの片隅で平和を拓く 75 / アフガン復興の帰結 78 / 恩讐を超えて 91 / 平和を奪還せよ 95 / 長き戦いの果てに 100

空爆と「復興」 現地ワーカー報告 105

- すぐ隣の国の子供なのに 106 / 最悪の天災時に、この小さな町では信じると 127 / 形なき誠意を届ける 138 / 腰を据えて、一つの事業を 142 / 「一ルピーも無駄にしない」 147 / 空爆下の村では誰もが貧しかったのです 150 / 他意のない事業こそ 162 / 食糧とスタッフの無事を祈った日々 166 / 今こそスタッフの基礎訓

アフガン最前線報告

(2001.9.11 - 2003.12.31)

229

練を 173 / NGOのするべき仕事とは 179 / パイロットファームは収穫のまつ盛り 186
 魅力ある農場を目指す 189 / 百年一日の如き国 193 / 一通の嘆願書 200 / 日本とアフ
 ガンの平和を危惧 203 / わずかな恵みを求め生きる人々 204 / アフガンの握手をわが
 身に刻む 207 / アフガン流臨床心得 208 / わが「現実」はアフガンの農場にあり 214
 蛇籠は完成、次は聖牛 216 / 今こそ我々の出番 220 /
 灌漑用水路建設の最前線から 223 / 日本人の願いを伝えたい 226

2001年 230
 2002年 329
 2003年 410

略年表 465 / 関連地図 470 / 現地ワーカー経歴 471 /
 水源確保事業の推移 472 / 付記 474 / 初出紙誌一覧 475



「カネがなくても生きていけるが、雪がなくては生きてゆけない」。現地の諺どおり、アフガニスタンは自給自足の山の国である。国土の大半が五、六千メートルを超える山脈で占められ、多くの人々は山あいの溪谷に住む。雪溶け水が命そのものだ。漠々と続く岩石沙漠の茶褐色、点状するオアシス村落の緑、そして、抜けるような紺碧の天空を背景に輝く山々の純白の雪——これがアフガニスタンの色彩である。

そこには、天・地・人の壮大な構図がある。生きとし生けるものは全て厳しい自然にひれ伏し、つつましく生命を全うする。テレビや車もないし、時には飢饉で瘦せこけ、病気で子供は簡単に死ぬ。だが、悲惨さを想像するのは筋違いだ。生死が隣り合う状況で、ささやかな時間を精一杯生きている。私たちが忘れ去った家族の温もり、人としての真心を失わない。よく何日も歩いて診療に出かけるが、野の花を手折って帽子にさす者が必ずいる。戦争や国際政治も無縁な山の民に心が和む。貧しいのは騒々しい「近代社会」の方だ。

中村 哲